

痛い思いしたのに．．．．－真央の場合・前編

プロローグ

１２月。町にジングルベルの音が鳴り響き、クリスマスムード一色。

紺野真央（まお）はみどりヶ丘中学校の３年生。姉がひとりいる二人姉妹である。姉は詩乃（うたの）といい大学３年生になった。真央は来年の春、この町の名門女子高の桜葉高校を受験しようと勉強に余念がない。

「あいたっ！　つつうー！」

この年の夏休みあたりから、ときどき右の奥歯が染みたりしていたが、最近ズキズキと痛むようになり、さらに前歯も冷たいものが染みるようになってきていた。いずれも治療済みの歯である。

「また虫歯になっちゃったのかな？」

鏡を見る。痛む奥歯は右下６番でアンレーが銀色に光っている。前歯も変色などはしていないように見える。

「ちゃんと治してあるもの。気のせいよね。気のせい」

あのころ……、つくし坂小学校の６年生だった真央は、歯医者が怖くてしかたなかった。

真央は幼稚園の年長さんの頃までは、母の姫乃が真央の乳歯を虫歯にしちゃいけないと必死で気をつけていたため、姉の詩乃のような重篤な虫歯はなかった。ただ真央も詩乃と同じで歯が弱く、上顎左右の乳切歯、下顎左右の乳臼歯が虫歯になってしまっていた。

だが、虫歯の進行止めの薬であるサホライド（フッ素化ジアミン酸）を塗布してもらい、虫歯の進行を止めることで済み、削る治療は受けたことがなかった。当時、歯医者さんで虫歯にサホライドを塗ってもらったことや虫歯になっていない歯にフッ素を塗ってもらったりしていた記憶が、うっすらと真央の頭の中に残っている。

姫乃が真央の虫歯予防に躍起になった理由はこうだ。

真央の６歳上の姉の詩乃は、３歳の頃から虫歯をつくっていて、５歳の時には全部の歯が重症の虫歯になってしまった。詩乃は姫乃に歯医者に連れて行かれたが、治療をいやがり、大泣き大暴れした。そこで歯医者はいやがる詩乃を抑えつけ、開口器とレストレーナー、それにベルトで抑制して、虫歯を治療した。それ以来、詩乃は歯医者とは縁が切れず、ほぼ毎年学校歯科検診で虫歯が

見つかり、姫乃に無理矢理歯医者に連れて行かれては、「痛い！！　痛い！！」と泣きながら虫歯の治療を受けていた。

姫乃が詩乃を歯医者に連れて行くたびに、幼かった真央はよくいっしょに歯医者に連れて行かれた。治療室にいっしょに入ったこともある。詩乃は、治療のたびに毎回泣いていた。詩乃の泣き声を聞くたび、削る治療を受けたことのない真央は、

“お姉ちゃん、また泣いてる……。歯医者さんは怖いトコなんだ。虫歯になったら、もの凄く痛いことされるんだ”
というイメージがついてしまった。

姉の詩乃が中学１年生のときに受けた治療は、いまでも真央の記憶に鮮明に残っている。

真央がつくし坂小学校１年生だった６月のある日、放課後に姫乃は真央を車で迎えに来ると、その足で皓歯大学教育学部附属中学校に行き、嫌がる詩乃を無理矢理歯医者に連れて行った。

歯医者に着いて受付を済ますと、すぐにドアから歯科衛生士が顔を出し、「紺野さあーん、紺野詩乃ちゃあーん。診察室にお入りください」と姉に呼び出しがかかった。

「詩乃、呼ばれたわよ。はやく行きなさい」

姫乃に診察室に入るよう促されたが、詩乃は、
「いやっ！！　いやっ！！　治療いやだっ！！　歯医者さんやだっ！！　歯医者さん嫌いっ！！　やだっやだっやだっ！！　治療痛いからやだっ！！　もう虫歯治ったっ！！　おうち帰るっ！！」
と目に涙を浮かべ必死で抵抗した。

「もう！　わがままいうんじゃない！　治療しないと、虫歯治らないでしょ！」

と姫乃が詩乃を叱るが、詩乃はなおも床にしゃがみ込んで診察室に入るまいと抵抗する。

すると、その様子を見ていた詩乃に呼び出しをかけた歯科衛生士とその他に３人の歯科衛生士が、

「大丈夫だよ。すぐ済むよ」

「詩乃ちゃん心配しないで。治療、痛くないよ」

と詩乃のところへやってきて、詩乃を宥めながら、姫乃といっしょになって詩乃を抱きかかえるように無理矢理診察室の中へと連れて行った。

「真央ちゃん、おとなしくここで待ってるのよ」

姫乃はいやがる詩乃を診察室に連れて行きながら、振り返って真央に諭す。

真央はコクンと頷いて、治療室に入っていく白のセーラー服（襟も真っ白で清潔さを強調した制服だ。）、臙脂色のタイ、紺のプリーツスカート、白のハイソックスの皓歯大附属中学の制服姿の詩乃と姫乃を見送った。

やがて診察室の中から、キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーンと歯を削る音がして、詩乃の虫歯治療が始まった。

それと同時に、

「うわあああーん、ひゃだっ！！ ひゃだっ！！ ひはい！！ ひはい！！
ほほひゅひゅひへえー！！ ああーん。はあーん。痛いっ痛いっ痛いー
っ！！ 毎日歯磨きするからっー！！ もう許してえー！！ 痛あーい！！」
という姉の泣き声と、

「はあーい、痛くない痛くない」

「もうすぐ終わるよ」

「もうちょっと我慢しようねー」

という歯医者さんや歯科衛生士さんの励ます声や、

「虫歯つくっちゃった詩乃が悪いんでしょ！！ すこしは我慢なさい！ 泣いちゃってみっともない。ママ恥ずかしいわ」

という姫乃の叱る声が聞こえてきた。

その声を聞いて真央は、幼い頃、詩乃が虫歯治療を受けるため姫乃に連れられて真央もいっしょに診察室に入った際、詩乃が大泣き大暴れで虫歯治療を受けているときに、診察室の中での姫乃が怒ったような、ほら見なさい、というような顔をして、治療台の横に立っていたのを思い出した。

“コワイ……”

待合室のソファーに腰掛けて待っていた真央は、詩乃の泣き叫ぶ声を聞いて、
“お姉ちゃん、中学生なのにあんなに泣いている……。やっぱり歯医者さんって怖いトコなんだ……”

と思い、知らず知らずに背中に冷や汗をかいていた。

そして詩乃の虫歯治療が終わり、帰る道すがら、姫乃は詩乃をこう叱った。

「もう。あんなに虫歯にして。女の子なのに、みっともないったら」

そのことは真央の脳裏にいまでも焼きついていて、思い出すたび、真央を嫌な気分にした。

そんな姉も、いまでは皓歯大学教育学部中高等教育科中学校教育課程の3年生となり、大学近くのマンションで一人暮らしをしている。いまだに歯が弱くよく皓歯大学歯学部附属病院の『リラックス歯科外来』に通っている。さすが

に、小学生の頃や中学生の頃のように歯医者で大泣きして治療を受けるというのはもうない。ただあいかわらず、涙をポロポロ流し、硬直しながら治療を受けているらしいが……。

「あのときは痛い思いをして治療を完了させたんだし、ちゃんと歯磨きもしてるし」

真央は小学校6年生の時に虫歯が痛み出し、痛い治療を受け、泣きながら虫歯を治療され、やっとの思いで完治させたのだ。

また歯が痛む。

「あっつっう！」

「やっぱり虫歯かな？ どうしょう……」

第1章 治療ユニットの上で

シャープペンシルを持つ手を止めたままの真央の脳裏に、初めて虫歯の切削治療を受けた小学校2年生の時のことが浮かんできた……。

7年前の春。真央はつくし坂小学校2年生、詩乃は皓歯大学教育学部附属中学校2年生になった。真央も詩乃も、特に詩乃は乙女への階段を一步一步上っていく年頃となり、ますます制服がよく似合ってきている。ふたりの姉妹は、年々可愛らしくなっていた。

6月に入り『歯の衛生週間』がはじまった。つくし坂小学校では、6月4日の火曜日の『虫歯予防デー』に体育館で歯科検診が行われていた。

「はい、次。紺野真央ちゃんね。ここ座って」

学校歯科医が新しい探針とデンタルミラーとコップとトレイから取り上げる。

「はい、大きくお口開けてね。アーン」

真央は、学校歯科医に促されて、怖いながらも素直に口を開ける。

歯科衛生士がライトの焦点を真央の口腔内にあてる。真央の口腔内がライトによって明るく照らし出される。学校歯科医の持つ探針とデンタルミラーが真央の口腔内に挿入された。

真央は小学校2年生ということもあり、乳歯と永久歯の混合歯列の時期にあった。永久歯は上顎、下顎の左右の6歳臼歯が生え、同じく上下左右の中切歯、それに下顎の左右の側切歯が、乳中切歯、乳側切歯から生え替わっていた。

「はい、右上からいきます。6番斜線、ここから乳歯になってEがC2、DもC2」

カツ、カツ。

学校歯科医が探針で第1乳臼歯と乳犬歯の間を突ついた。

「ふうん、んんっ」

不快感で思わず声を上げる真央。

「うーん、乳犬歯にも、小さいけど隣接面から虫歯が広がってるね。CはC1ね。BはC2。次永久歯で1番斜線。左にいて1番斜線。ふたたび乳歯で、BがC2、Cは斜線。D、EはともにC2。永久歯6番CO。下へいて、永久歯6番C1。うーん、もう永久歯が虫歯になってるなあ〜。カリエスリスクが高いなあ〜。歯磨きもできてないなあ……」

「真央ちゃん、おとなの歯がもう虫歯になってるよ。しっかり歯磨きしないとダメだよ」

学校歯科医が、デンタルミラーをいったん真央の口腔からだし、困ったような顔でいう。

“えっ！ そんな！ おとなの歯が虫歯になっちゃったの！？ どうしよう、ママに叱られる……。くすん”

真央は学校歯科医にたくさんの虫歯を指摘されている上、永久歯が虫歯になってしまったことを知って半べそをかきそうになる。

学校歯科医は、それでも気を取り直したようにふたたび真央の口腔にデンタルミラーを入れた。

「つぎ行きます。EがC2。D……」

デンタルミラーでくわしく診る学校歯科医。歯科衛生士が第1乳臼歯がよく見えるようライトをかざす。

「DはC3だね。次C斜線。ここから永久歯になります。2番1番斜線。右いて1番2番斜線。次乳歯ね。C斜線。Dは……」

学校歯科医はデンタルミラーと探針で、真央の右下第1乳臼歯と第2乳臼歯を念入りに診る。

「DはC2。ちょっとC3に近いかな。で、EはC3。最後、永久歯6番CO。以上です」

学校歯科医は、真央の検診が終わると、

「真央ちゃん、悪化している虫歯があるよ。早く歯医者さん行かないとダメだね。お母さんに歯医者さん連れて行ってもらって、ちゃんと治療してね。それにさっきもいったけど、永久歯、おとなの歯だね。そのおとなの歯がもう虫歯になってるよ。歯磨きもできてないようだし……。歯垢、歯についた汚れだ

ね。その歯垢がいっぱい歯についてるよ。保健の先生に歯磨きの仕方、ちゃんと習ってね」

ときつく注意した。

「はい……」

真央は、いっしょに歯科検診を受けている友だちがいっぱいいる中で、学校歯科医に注意され、恥ずかしかった。頬を赤らめながら、検診のいすから立ち上がった。

“ほんとにどうしよう……。ママ、怒るだろうな……。それに歯医者さんコワイし……。治療ってどんなことされるんだろ。お姉ちゃん、歯医者さんでいつも泣いてるし……。きっとすごく痛いんだ！ どうしよう……。怖くて涙出てきちゃった”

そう考えながら、真央は憂鬱な気持ちだった。

真央の上顎左右の乳中切歯はともに虫歯だったが、サホライドを塗って虫歯の進行を止めていたため、削る治療は受けずに済み、キレイな中切歯に生え替わった。ただ、まだ残っている上顎左右の乳側切歯はサホライドで黒ずんだ虫歯であり、生え替わった永久歯の中切歯を虫歯から守るために、今回は削って詰め物をする治療にした方がよいと、検診した学校歯科医はそう判断して、歯科検診票をつけている歯科助手に、その旨を記載するように指示した。

また真央の口腔内を診て、カリエスリスクが高そうだと判断した歯科医は、生えている途上にある6歳臼歯でまだ虫歯になっていない右上の歯の小窩裂溝をシーラントで予防填塞した方がよいと考え、その旨も歯科検診票に記入するように指示した。

真央の第1乳臼歯や第2乳臼歯、それに上顎の乳犬歯や乳側切歯は、いままでC1、C2の虫歯だったが、サホライドで進行を抑制していた。だが今日受けた学校歯科検診で、下顎右の第2乳臼歯、左の第1乳臼歯がC3という診断を受けてしまった。そのほかの虫歯も、虫歯を削り詰め物をする治療を受けなければならないまでに進行していた。乳側切歯は左右とも溶けて小さくなっている。

それにこれから永久歯が段々と生えてくるから、永久歯を虫歯から守るためにも、ちゃんと治療を受けなければならない時期に来ており、さらに真央の虫歯は削って詰める治療をしなければならない段階まで進行していた。

そして、その年の夏休み。

真央は春の学校歯科検診で、乳歯についてC3の虫歯が2本のほか9本の虫歯を指摘され、姉の詩乃とふたりして、姫乃に無理矢理歯医者へ連れてこられた。ふたりとも渋々歯医者に来たのだった。

それまで真央は、虫歯がなかったわけではなかったが、それまで姉の詩乃とともに行っていた歯医者には齲窩がある大きな虫歯以外乳歯はできるだけ削らないという方針をとっており、サホライド、すなわちフッ素化ジアミン酸の塗布だけで済んでいて、虫歯を削る治療を受けたことはなかった。姫乃が比較的真央の歯の健康に気をつけてくれたおかげだ。

真央の姉の詩乃は、小さい頃から虫歯がたくさんあって歯医者で何度も虫歯治療を受け痛い目にあってきた。治療のたびに、詩乃は大泣き大暴れをしていて、ほとんど毎回といっていいほどレストレーナーかベルト、それにアングルワイダーで抑制されて治療を受けていた。

詩乃の虫歯が多いことは、姫乃にとって後悔と頭痛のタネだった。幼い頃から詩乃に痛い思いをさせたからだ。

姫乃自身も歯には苦労してきたから、娘には歯で苦労をさせまいと考えてきたのだが、姉の詩乃の場合はうまくいかず、虫歯だらけにしてしまった。そこでせめて妹の真央だけでもと、真央の幼いときには姫乃が仕上げ磨きなどもやってくれた。おかげで、真央は虫歯があっても削る治療は受けなくて済み、それまでは歯医者の定期的な管理だけで済んでいた。

だが真央も小学生となり、育ち盛り食べ盛りとなる。友だちも増え、友だちと遊んだときや学習塾の帰りなどに、つついコンビニなどでジュースや甘いお菓子を買って食べたりもする。そんなときは、姫乃の目も届かず、当然歯磨きはしないから歯の手入れも怠りがちになる。それで真央の虫歯は進行止めのサホライドだけでは進行を防ぎきれず、この年の春に受けた学校歯科検診で、とうとう『早急に治療を要する虫歯があります』と治療を勧告されてしまった。治療勧告をされた虫歯はかなり進行しているため、歯医者で削る治療をしなくてはならないことになってしまった。

真央が1学期の終業式の日学校からもらってきた『治療勧告書』を見て、姫乃は目を見張り、ついでため息をついて、

「もう！ 詩乃だけじゃなく、真央まで、銀歯にしないなんて！」
「ママがせっかく真央の歯を虫歯にしないよう、虫歯になってもひどくならないように気をつけてきたのに……。真央がちゃんと歯磨きしないから、虫歯になるし、ひどくなるのよ。ママ情けないわ」

と真央を見、怖い顔をしていった。

「ママがお姉ちゃん、真央のふたりとも歯医者さん連れて行ってあげるから。ちゃんと治療受けて、虫歯治すのよ」

姫乃に釘をさされてしまった。

“ごめんなさい、ママ……”

真央は、姫乃に叱られたことが悲しかったが、同時にそれまでの詩乃が治療される姿を見て、『歯医者には怖くて痛いところだ』というイメージがついていたため、歯医者に行くことが怖くて仕方なかった。

夏休みに入った3日目の月曜日の7月23日。真央と詩乃は歯科医院の待合室のソファに座っている。

真央はウエストうしろの大きなリボンが可愛らしい青いワンピース。ピンクのソックスがアクセントになっている。詩乃は皓歯大附属中学の制服で、白のセーラー服、臙脂色のタイ、紺のプリーツスカート、白のハイソックスがよく似合っている。だが可愛らしい服装とは裏腹に、ふたりとも不安そうな顔をしていて、表情が憂鬱に曇っている。

真央が姫乃に連れてこられた歯科医院は、いままで姉の詩乃とともに診てもらっていた歯医者とは違う歯医者だった。いままで通っていた歯医者は姫乃が嫁ぐ前に住んでいたとなり町にあり、車で1時間以上かかる距離にあるため通院がかなり負担だった。それで姫乃は、近くでいい歯医者がないかと探していたのだが、姫乃の主婦仲間の数人から『あの歯医者は治療が早く済むし、それに小児歯科に力を入れてるみたいで、子どもを連れて行ったときなんかは大助かりよ』と聞いて、それで連れてきた歯医者だった。

その歯医者は自宅から歩いて15分ほどの距離にあった。

そこは、以前はコンビニエンスストアだったのだが、1年半ほど前コンビニが閉まり、その後内装を改造して歯科医院となったものだった。だから建物は外壁こそ変わっているが、コンビニそのものといってよかった。そのためコンビニだった名残を留めて窓が大きく、治療中を表す无影灯のオレンジ色の光がよく見えた。

またこの歯医者は、虫歯は削って詰めなければ治療をしたことにはならないと考えている歯医者だった。そしてそのうちにこの歯医者で治療を受けたことのある女の子たちの間から、小学校や中学校でこんな噂が広まりだした。

「ねえねえ、知ってる？ あそこの歯医者さん、小学生や中学生の女の子が来て、その子が自分好みの女の子だったりすると、必ず別の部屋で治療するんだって！」

「わたしもそう聞いた！ かなり痛い治療されるみたいで 治療が終わるとスカートがめくれてるんだって」

「わたし、あそこに治療に行ったよ。痛かったよ……。わんわん泣いちゃった……。終わったら、制服のスカート全開！ ロリコン歯医者って評判だけど小児歯科ってそこだけだから、仕方なくって感じで行ったんだよね……」

「その歯医者さんてえ、ホントにロリコンなの!？」

「そうみたいよ」

「じゃあ、治療に行くときは制服の下にブルマーかハーフパンツ、穿いてかないとダメだよな……」

真央はそのときの歯科医院の名称を今でも覚えているが、今までその歯科医院を努めて思い出さないようにしてきた。とても怖くて痛い思い、さらには恥ずかしい思いをしたからだ。でも忘れようにも忘れられない。その歯科医院は『吉木歯科医院』といった。

ふたりとも歯医者から逃げ出さないよう姫乃に見張られながら待っていると、ピンクのナース服に白いエプロンを身につけ、エバーマスクを口にかけて黄色のラテラックスグローブを填めた歯科衛生士が、治療室のドアから姉の詩乃の名前を呼んだ。

最初に詩乃が治療室に入らなければならない。詩乃はいやがって抵抗したが、歯科衛生士3人に無理矢理治療室に連れて行かれた。やがて治療室からキューーン、キューーン、キューイーーンという音と詩乃の「うわああーん、ひはいっ、ひはいっ、ゆひゆひへえーっ」という泣き声が待合室まで聞こえてきた。真央は、泣いている姉の声を聞いて、子ども心に恐怖心がわき上がり、姫乃の顔を見た。姫乃は涼しい顔をしている。

そのとき治療室のドアが開いた。キューーン、キューーン、キューイーーンという虫歯を削るタービンの音と詩乃の「うわああーん、ひゃひゅへへえーっ」という声が一段と鳴り響く。

歯科衛生士が顔を出し、

「紺野真央ちゃあーん、診察室にお入りくださあーい」

と真央を呼んだ。

真央は姉の泣き声に怖くなり、ソファから立てない。

結局、姫乃に付き添われて治療室に入った。

女の子たちの噂とは違って、治療室の中にはレントゲン室以外に別の部屋はなかった。

治療室の中では、詩乃の泣き声と虫歯治療のタービンの音がひととき大きく聞こえる。詩乃は、歯科衛生士に3人がかりで抑えつけられて、歯科医の治療を受けている。

キューイ、キューイ、キューイーーン。

「ああーん、わんわん、ひはいっ!! ひはいっ!!」

「はだぁ～い！ いがっ！ いがっ！ あぁぁ～」

しかし歯科医はタービンによる切削治療を止めず、
「麻酔してるからそんなに痛くないだろ！ もうちょっとだから我慢しなさい！」

といい、詩乃は更にキューーン！と治療されている。

「もうちょっと我慢しようねえー」

「詩乃ちゃん。虫歯つくっちゃったの、詩乃ちゃんでしょ？ こんなになるまでほおっておくから削るのが痛いよ。痛いのがイヤならちゃんと歯磨きしようねえ～」

歯科衛生士も詩乃を抑えつけながら、口々にいう。

キュ、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイキュイーン。

「はぁん、はんはん、えっえっ。ほへんははい。えっえっ。ほれははは、ひゃんほはひはひひゅひゅははー。ほほひゅゆひへー。ひはーいっ！！」

「いだいでふ！ いだいでふ！ あぁぁ～いがっ！ いがっ！ せんせえ～いだっ！ いだっ！」

詩乃はなんとか治療を止めて欲しいと懇願するが、歯科医はあいかわらずタービンで詩乃の虫歯治療を続けながら冷静にいった。

「神経の治療なんだから、少しは痛いのは当たり前だ！ 我慢しなさい！ こんなになる前に治療してれば痛くないんだぞ！ 口もって開けて！ ほら！ 動かない！」

そんな姉の姿を見て、真央はこれから受ける歯科治療がますます怖くなった。
「詩乃ったら、みっともない！ 中学生にもなって、虫歯の治療で泣くなんて。ホント、ママ恥ずかしいわよ」

「真央はおりこうさんに治療受けなきゃダメよ！ お姉ちゃんみたいに泣いたりしたら、恥ずかしいでしょ」

姫乃は詩乃が治療される姿を見て、真央の気持ちも知らないで冷静な顔で真央にいった。

“どうしよう。泣いたらママに叱られる……”

真央は不安が募るばかり……。

「はい、ここに座ってねー」

歯科衛生士がイエローの治療ユニットを指さして、真央に座るように促した。
「どうしたの？ 大丈夫だよ。怖くないよ」

真央は、これからどんな治療をされるのか不安で治療ユニットになかなか座れず、歯科衛生士のことばに返事もできない。

「真央座りなさい！ それに、お姉さんにちゃんとお返事しないとダメじゃないの！」

姫乃は真央を叱った。

「まあまあ、お母さん」

歯科衛生士が姫乃を制して、

「真央ちゃん、お姉ちゃんが座らせてあげるね」

というと、歯科衛生士は真央を抱え上げ、治療ユニットに座らせた。

「はい、エプロンつけるからねー」

今度は歯科衛生士がクリーム色のエプロンを両手で持ってにこやかにいう。真央の胸元に歯科エプロンがつけられた。真央は歯科エプロンを掛けられながら、泣きそうな表情になっている。

真央を治療ユニットに座らせ、真央に歯科エプロンをつけると、歯科衛生士は

「お母さんは外の待合室で待っててください」

と姫乃に治療ユニットから離れ、待合室で待っているようにいった。

「はい。それではよろしくお願いします。じゃあ、真央、ちゃんと治療受けるのよ」

といって、姫乃は治療室から待合室へ出て行く。

真央は怖くて涙が出そうになる。

「じゃあ、先生呼んで来るから待っててね」

「はい……」

不安な気持ちで小さく返事をする。

歯科衛生士は、真央の治療を担当する歯科医を呼びにいった。エプロン姿でひとり治療ユニットに残される真央……。

“治療痛いのかな？ ドリルで削るのって痛いのかな？ うん、きっと痛いんだ。だってお姉ちゃん、ドリルで治療されるとき、いつも泣いてるもん！ さっきもお姉ちゃん泣いてたし……。くすん、コワイよお〜”

「はい、口開けて。アーン」

歯科医がエバーマスクを口をかけ、黄色のラテラックスグローブを填めた手でデンタルミラーと探針を持ち、胸元にクリーム色の歯科エプロンをつけられた真央に開口を促す。

「怖くないよ。大きくお口開けようね。あ〜ん」

歯科衛生士もにこやかにいう。

真央は心底治療が怖かったが、両脇を歯科医と歯科衛生士に囲われていては、逃れようがない。仕方なく怖々と口を開けた。無影灯のオレンジ色に光るハロゲンライトが真央の口腔内を照らす。歯科医のデンタルミラーと探針が真央の口腔に入った。

「あー、これはひどいなー」

歯科医がいう。

「口の中、虫歯だらけじゃないか！」

真央は怖さとともに恥ずかしさに襲われた。

「真央ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？ 虫歯いっぱいあるじゃない」

歯科衛生士も容赦なく、真央にいう。

「これはちょっとお母さんに注意しておかないと……。お母さん呼んできて！」

「はい、せんせい」

指示を受けた歯科衛生士が、詩乃、真央姉妹の母の姫乃を呼びに行く。

母の姫乃がやって来た。

「せんせい、なにか……」

「お母さん、お子さんの歯をちゃんと見てあげないとダメじゃないじゃないですか！ 真央ちゃんも、お姉さんの詩乃ちゃんも虫歯だらけにして！」

歯科医が姫乃にきつく注意する。

「はい、申し訳ありません」

姫乃は恐縮している。

姫乃が歯科医にさんざん注意されて待合室に戻っていったあと、いよいよ真央の治療が始まった。

最初に麻酔注射をされる。浸潤麻酔のカートリッジを装着した注射器とデンタルミラーを手に持った歯科医が、真央に

「はい、大きく口開けて！ アーン」

といった。

「真央ちゃん、最初にチクッとするだけで痛くないよ～」

歯科衛生士も微笑みながら、真央にいった。

“はじまっちゃう……。コワイよお～”

真央が口を開けられないでいると、歯科衛生士が真央の顎を押さえ、口を開けさせた。

“えっ！？”

「ふんがあー、やらっ！ やらっ！」

「大丈夫だよー。ちょっと我慢しようねー」

歯科衛生士がにこやかな顔で、真央の口を開けさせたままいう。

グサッ。

歯茎に注射針が突き刺さり、その痛さに真央はポロポロと涙を流した。

「ふうん、ううっ。はぁ～ん」

“いっ、痛いっ！！ 痛たたたぁーっ！！”

麻酔注射の痛みに指先が敏感に反応し、つま先がぴーンと伸びる真央。膝小僧は震えている。さらに顔の表情は苦痛に歪んでいる。緊張しきって力の入った肩先。胸元に掛けられたクリーム色の歯科エプロンには真央の浅く早い呼吸が伝わり、その呼吸を如実に表し上下している。

「大丈夫だよ。がまんしてー。はい、リラックスしてー、肩に力入れないで～」

「はい、がんばってー。もうすぐお薬全部はいるからねー」

真央は足をピクンピクンと動かして、麻酔注射の痛みに耐えた。ようやく麻酔カートリッジが空になり、麻酔の薬液が真央の歯茎に入った。

「もう一回がまんしようねー」

容赦なく2本目の麻酔注射が用意され、真央はもう一度麻酔注射の痛みに耐えなければならなかった。

麻酔注射をされてから5分ほどの時間が経った。その間に歯科医はエアータービンにスチールバーを装着して、真央の虫歯の切削治療の用意を完了していた。

「麻酔効いたかな～。感じる？」

歯科医はデンタルミラーの柄でコンコンと真央の歯を叩き、麻酔の効果を確認した。

真央はプルプルと首を横に振った。

「効いたみたいだね」

そういうと、歯科医はブランケットテーブルにかけてあるエアータービンを手に取り、さらにデンタルミラーを持った。歯科衛生士もバキュームとスリーウェイシリンジを手を持った。

「はい、大きく口開けて」

歯科医がエアータービンを構えている。

「痛くないからね～大きくアーンしようね～」

歯科衛生士が真央に微笑みながら、開口を促す。

“くすん。こわい、コワイよぉ～”

真央の口腔内に、バキューム、エアータービン、デンタルミラー、スリーウェイシリンジの順に次々と治療器具が挿入された。真央の口腔内は治療器具でいっぱいになった。

さらに真央の患歯がハロゲンライトでよく照らし出されるように无影灯が調整される。

歯科医が治療ユニットのペダルを踏み、真央の齲蝕した患歯にあてがわれたエアータービンが回転を始める。

キューーン、キューーン、キューイーーン。

キューイ、キューイ、キューイーーン。

キュ、キューイ、キューイ、キューイーーン、キューイキューイーーン。

真央の虫歯の治療が始まった。かなり深くまで進行した虫歯だ。

しばらく経つと、乳歯の薄いエナメル質は容易に切削され、エアータービンのスチールバーは軟化象牙質を削りだした。タンパク質が焦げるような匂いが漂い出す。軟化象牙質を除去していくと、歯髄に刺激が伝わりだした。それに窩洞を形成するため、健康な象牙質も削らなければならない。

真央は、初めて経験する虫歯治療の痛さに泣き出してしまった。

「ああーん、うわああーん、ひはい！！ ひはい！！」

「痛くない～痛くない！」

「えっ、えっ、ひはい、ひはいよほ～！！」

「もう小学生のお姉ちゃんなのに、泣いてちゃおかしいよ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶだよ！ がまんしようねー」

「隣の幼稚園の女の子、治療がまんしてるよー。真央ちゃん、お姉ちゃんなのに、泣いてちゃ恥ずかしいよ」

「うわーん、わんわん。ひゅひゅひへえー。イダァーイツ、イダァーイよお～！！」

真央は虫歯の切削治療の痛さに、汗と涙と唾液で顔がグチャグチャになる。真央は削る痛みに我慢できなくなり膝を立てた。青色のワンピースのスカートが膝から滑り落ち、真央のスカートが捲れ上がり、全開となる。真央の可愛いイチゴのパンツが丸見えになる。

「真央ちゃん、お膝立てちゃダメだよ～。恥ずかしいんだあ～、おパンツ見えちゃってるよ～」

「治療中はおとなしくしようね～」

いいながら、歯科衛生士が真央を膝に手を掛け、膝を伸ばそうとする。いつの間にか真央の診療補助につく歯科衛生士は2人に増えている。

キューーン、キューーン、キューイーーン。

キュ、キューイ、キューイ、キューイーーン、キューイキューイーーン。

キュイ、キュイ、キューーン。

コオー、コオオオー。

「ひいいひいい」

だが虫歯を削る痛さは、ますます増してきて、容赦なく痛みが真央を襲った。

キューィーン、キュイ、キュイ、キューーン。

ズキン！

“痛っ！ 痛たた一つ！ 痛あーいっ！！”

歯科医のタービンが真央の虫歯の深いところを抉るように削った瞬間、激痛が真央を襲った。診察室に入る前にトイレに行っていなかった真央は、虫歯治療のあまりの痛さに歯科治療ユニットの上でおもらしをしてしまった。

ジョワーっ。

みるみる濡れていく真央のお気に入りイチゴのパンツ。パンツに黄色い染みが広がる。同時に治療ユニットにできるおしっこの水たまり。恥ずくて恥ずかしくて泣きながら真っ赤になる真央。

「えーん、えんえん、ぐすん、くすん、エッ、エッ」

「あ～あ、やっちゃった！」

「タオル！ タオル！」

「おパンツ脱ごうね」

真央はパンツを脱がされ、おしっこに濡れた秘部を歯科衛生士にタオルで拭かれた。青色のワンピースもおしっこの染みがつき濡れたままだったが、おしっこをしぼってユニットとワンピースの間にタオルがおかれ、治療が再開される。真央の下半身は、タオルケットこそ掛けられたが裸のまま……。

真央は恥ずかしさと痛さと怖さで泣きながら治療を受けた。

「うわあーん、うわん、わん、えっ、えっ、ぐすん、えっ、えっ」

「真央ちゃん、恥ずかしいんだあ～。こんなになるのも真央ちゃんがちゃんと歯磨きしないからだよ。虫歯だらけにしちゃって！ 痛いのがいやなら、ちゃんと歯磨きしないとダメよ。虫歯にしちゃったのは真央ちゃんなんだから」

歯科衛生士がやさしい顔で厳しいことをいう。

キューィーン、キューィーン、キューィーン。

「真央ちゃん、少しは我慢しなさい。虫歯をつくったのは真央ちゃんなんだよ。痛いのが嫌なら、きちんと歯磨きしなさい」

真央の虫歯を削りながら、歯科医が冷静な顔で厳しく注意する。

「うわあーん、わんわん。ひはい！！ ひはい！！」

「ダメよー、泣いたって。今日はおっきい虫歯さん退治するまで、治療終わらないよ。がまんしようねー」

「反対側もおっきい虫歯さんだったでしょ。ジェット機さんできれいにしようねー」

歯科衛生士が、にこやかに真央に注意する。

キュイ、キュイ、キューーン。

コオオオオー、コオー。

「はぁーん、はんはん、やら！！　やら！！」

またしても虫歯を削る痛みに暴れ、足をパタパタする真央。下半身に掛けられたタオルケットは飛んでしまった。真央は歯科治療ユニットの上で自らの恥ずかしい秘部を晒して、泣きながら歯科治療の痛みや恐怖に耐えていた。

真央は、いままでに何度も詩乃が治療される姿を見ていて、『歯医者さんは怖くて痛いところだ』というイメージがついていた。そのためこの日の治療では、治療が始まる前から歯医者さんに抵抗しており、先生のほかに歯科衛生士3人がかりで抑えつけられて治療された。

それでもその後も姫乃に連れられて何度か歯医者に通い、乳歯冠を被せられるなど何本かは虫歯の治療が完了した。だがほぼ夏休みの間中歯医者に通っても治療が完了しない上に痛い治療が続くため、姫乃が夏休み最後の治療に連れて行こうとしたときに、真央は2階の自分の部屋のクローゼットに逃げ込んでしまった。

「真央！　なにしてるの！　早く出てらっしゃい！　歯医者さん行くわよ！」

「やっ！　やっ！　真央もう歯医者さん行かない！　歯医者さん行きたくない！」

「ダメよ！　治療しないと虫歯治らないでしょ！　いいから出てらっしゃい！」

「やーっ！　真央行かない！　絶対行かない！」

「真央ったら恥ずかしいんだー。歯医者さん怖いんですよ」

姉の詩乃が、自分のことは棚に上げて真央にいう。

「なによー。お姉ちゃんだって歯医者さんでいっつも泣いてるくせにーっ！」

真央もクローゼットの中からいい返す。

「いったわねー」

「ふたりともやめなさい！」

姫乃がふたりを叱る。

「……まあ、大きな虫歯は治療が済んでるし……、それに真央の虫歯は乳歯だけだし……。乳歯は生え替わるから、ちゃんと歯磨きさせればいいかあ……。じゃ、詩乃行くわよ」

姫乃が詩乃の手を握り、引っ張った。

「えっ、なんでわたしだけ……。真央が行かないならわたしも歯医者さん行かないっ！」

詩乃は足を踏ん張って、歯医者に連れて行かれるのに抵抗する。

「なにいてんの！ 詩乃の虫歯は全部永久歯の虫歯だし、ほんと虫歯治さないと歯がなくなっちゃうよ！ それに真央より虫歯だらけじゃない！ さっ、歯医者さん行くわよ」

「えーっ！ やだっやだっやだあーっ！」

歯医者へ行くまいと必死で抵抗する詩乃を、姫乃は無理矢理歯医者に連れて行った。

姫乃と詩乃の声がなくなり、クローゼットの外が静かになった。

カチャッ。

クローゼットから真央が顔を出す。どうやら姫乃と詩乃は歯医者に行ってしまったようだ。

“くすん、歯医者さんいやだ……”

真央は、虫歯を削られて仮封のままの歯がいくつかあったが、治療のあまり痛さに虫歯治療が完治していないのに歯医者通いを途中で止めてしまった。虫歯を放置したのである。

そしてその歯医者通いを最後に、それからは学校歯科検診で虫歯を指摘されても怖くて歯医者に行かなかった。小学校6年生に放置したままの虫歯が痛みだし、痛み止めの薬を飲んでいるところを姫乃に見つけて無理矢理歯医者に連れて行かれるまでは……。

ユニットの上でおもらしして、大泣き大暴れで治療を受けたことを思い出すと、恥ずかしくて頬が赤くなる。

「あれからホントに歯医者さんが怖くなって、治療行かなくなっちゃって……」

「でも小学校6年生のとき、ほおったままの虫歯が痛み出しちゃって、ママに無理矢理歯医者さんに連れて行かれたんだ」

「あの歯医者さんは、真央の歯医者さんコワイ気持ちわかってくれて、それで全部虫歯治すことができたんだ。治療はとっても痛かったけど……」

「あのとき痛い思いはしたけど、ちゃんと治療してよかった。あれから歯医者さん行かずに済んでいるもの」

真央は続いて思い出した……。小学校6年生のいまごろの時期を。

第2章 つくし坂歯科クリニック

「……でも、ほんとにあのときは痛かったな……。もうあんな痛い目には
遇いたくないし……。また虫歯なら早い目に歯医者さん行かないと……」

でもあの痛い治療を思い出すと、なかなか決心がつかない。

「あのときの治療は、長かった……」

真央は、姉の詩乃が虫歯治療を受けている時毎回泣いていたため、『歯医者
さんは怖いトコなんだ』ってイメージがついてしまった。さらに真央が小学校
2年生の時に受けた虫歯治療が怖くて痛くて恥ずかしいものだったから、それ
以来歯医者さんが怖くて、学校歯科検診で虫歯を指摘されても歯医者に行っていな
かった。真央は、姉が虫歯治療で泣く姿と真央自身が受けた虫歯治療がトラウ
マとなって、完全に歯医者恐怖症となってしまうていた。

あの歯科治療から4年。真央は小学校6年生になっていた。歯医者には乳歯
が永久歯に生え替わってから一度も行っていない。歯磨きもしっかりできてい
なくて、奥歯のほとんどが虫歯になってしまっていた。

ある日鏡で奥歯を見ると、虫歯らしい歯が口腔内にいっぱいあり、真央は怖
くなってしまった。奥歯の溝はほとんど全部が薄茶色や薄褐色に変色している。
治療途中で歯科医院に通院しなくなり、ほおったままの乳歯の虫歯から生え替
わったばかりの永久歯に虫歯菌が感染してしまったからだ。

萌出したばかりの永久歯は幼若永久歯といって、エナメル質がまだ柔らかく
虫歯菌に対する抵抗力が弱い。真央や姉の詩乃みたいに虫歯だらけの乳歯を持
つ口腔では幼若永久歯はひとたまりもなく瞬く間に虫歯になってしまう。

さらに6歳臼歯は変色をとおりすぎ、大きな齲窩が開いてしまっている。最
近は6歳臼歯の神経が死んでしまったのか、4年生や5年生のときのようなひ
どい痛みに襲われるということとはなくなっていた。上顎と下顎の左右の6歳臼
歯4本は、おそらく歯髄壊死か歯髄壊疽を起こしてしまっているようだった。

だが6歳臼歯の根の先に鈍痛があるようなズーンとした痛みが走ることがあ
る。根尖部に歯根嚢胞の病巣があるためだ。

12歳臼歯も下の2本が萌出し、あと上の2本も萌出がはじまっていたが、
下顎の12歳臼歯は左右の2本とも他の虫歯から虫歯菌が感染し、虫歯になり
かけていた。

「聞いて、聞いて。でね、真央ね……」

「ウッ」

友だちが顔を背け、こういった。

「真央ちゃん、お口臭い！ お口匂うよ」

真央は恥ずかしさで真っ赤になり、思わず手で口を押さえる。真央の口腔は、放置している虫歯の齦窩に食べ物の残滓などが溜まって腐敗し、口臭が強く匂うようになっていた。

そして迎えた小学校6年生の年の学校歯科検診。この年の学校歯科検診は『歯の衛生週間』に入ったばかりの6月5日の月曜日に行われた。本来は6月4日の『虫歯予防デー』に行われるのだが、この年は6月4日が日曜日ということもあって、翌日の6月5日に行われたのだ。

「はい、次。紺野真央さんだね」

学校歯科医が真央の名前を呼んだ。真央は、虫歯だらけの口腔内を診られるのが恥ずかしく涙が出そうになる。いやいやながら学校歯科医の前のいすに座ると、助手がすかさず真央の口元にライトを当てる。強烈なライトが真央を照らす。眩しい。

「はい、大きくアーンしようね」

学校歯科医がデンタルミラーと探針を手に持ち、真央に口を開けるように促す。

真央の口腔内は虫歯だらけの状態だった。

というのも小学校2年生の時に受けた虫歯治療があまりにも痛くて、虫歯を完治させるまで歯科医院に通院しないで、乳歯の虫歯を放置したままにしたため、生えたばかりの永久歯もすぐに虫歯になっていった。

歯磨きも虫歯を磨くと痛いので、つつい歯を磨かなくなる。第2乳臼歯と6歳臼歯の隣接面に歯垢が溜まり、6歳臼歯は隣接面、近心面、さらに歯肉が被さった遠心面のところから虫歯になって、歯冠が崩壊寸前になっていた。

前歯も乳側切歯の治療に取りかかる前に治療に通うのを止めてしまったため、乳側切歯と中切歯の隣接面から虫歯が広がってしまった。さらに右上は乳犬歯の虫歯を治療せずに放置したため虫歯が進行し、これも隣接面から、虫歯の乳側切歯が抜け、キレイに生え替わったばかりの側切歯に虫歯が感染し広がっていた。乳歯の虫歯を放置していた結果、せっかく生え替わった永久歯も次々虫歯にしてしまっていた。

真央は虫歯がいっぱいある口腔内を見せるのが恥ずかしくていやだったが、学校歯科医がデンタルミラーと探針を持って開口を促すので、仕方なく小さく口を開けた。助手のライトが容赦なく真央の口腔を照らす。学校歯科医がデン

タルミラーと探針を真央の口の中に入れ、デンタルミラーで唇を押し広げながら、

「もう少し大きく開けて」

という。

真央は目を瞑り、さっきよりも口を大きく開けた。

学校歯科医が真央の歯式を呼び上げ出す。

「右上から。6番、あー……これはひどいねー」

学校歯科医がデンタルミラーで、真央の右上6番をよく検診する。

「痛い？」

カッカッ。

探針で右上6番を突っつかれたが、真央は痛みは感じなかった。それでプルプルと首を横に振ると、学校歯科医は、

「痛くないってことは、もう神経が死んでるってことだよ。早く歯医者さんで治療しないと。でないと抜歯、抜くしかないってことになるよ。6番はC3……、限りなくC4に近いC3ってとこかなあ〜」

と冷静な顔でいう。

「次です。5番斜線、4番C1、3番斜線。2ばあ……」

学校歯科医がデンタルミラーで右上の側切歯と中切歯の隣接面、それに右上の中切歯と左上の中切歯の隣接面を覗き込みながら、

「うーん、前歯の間に虫歯ができてるなあ……。2番C2、1番もC2、左に行って1番C2。歯の間に虫歯ができるってことは、歯磨きができてない証拠だよ。ちゃんと歯磨きしないと……」

と真央に注意する。

“えっ！！ どうしよう、前歯まで虫歯になっちゃった。歯医者さん行ったら……。きっと治療痛いんだ。きっと小学校2年生のときみたいに痛くて泣いちゃうんだ……。お姉ちゃんみたいに痛くて泣いちゃうんだ！ それに前歯にも銀歯詰められちゃうんだ！！ きっとそうだ！！ そんなのイヤだっ！！ コワイよお〜。くすん。前歯に銀歯なんてやだっ！！ 恥ずかしいよお〜、よけい歯医者さん行けなくなっちゃうよお〜”

真央は、学校歯科医に前歯が虫歯と指摘されて動揺していた。

そんな真央の気持ちを忖度もせず、学校歯科医は検診を進める。

「……6番、あー、これもひどいねー。6番C3だね。下へ行って、7番C1。うーん、この12歳臼歯まだ生えてる途中なのに、もう虫歯になってるよ。もっと歯を大切にしないと。6番、これもC3だなあ〜。5番斜線、4番C1。3番から右の4番まで斜線。5番C1、6番、うーん、これもほとんど歯冠が崩れちゃってるなあ〜。C3……だね。7番……」

カッカッ。

「ふうん、ふん」

探針で突っつかれ、思わず声が出た。

「これも結構進行してるなあ〜。7番はC2です。以上です」

学校歯科医が、デンタルミラーと探針を真央の口腔内から取り出す。それから消毒液の入ったコップに使用済みのデンタルミラーと探針を入れ、真央に向き直っていった。

「ええっと、紺野真央さん。虫歯いっぱいあるよ。うーん……、歯垢もいっぱいついてるし」

と探針で歯垢を掻き出し、ライトにかざして真央に見せる。

“そんなあ……、こんなにみんなの見てるところで見せなくてもいいのに……”

真央は恥ずかしさで真っ赤になる。

「歯磨きができてないなあ〜。ぼくからもいつとくから、保健の先生に歯磨きの仕方を教えてもらってね。いい？」

それから学校歯科医は、真央の去年の歯科検診の結果を見ながら、

「……去年も同じだね。というか去年よりも虫歯増えてるよ。どうして歯医者さん行かないの？ はやく治療した方がいいよ。このままじゃあ、虫歯がひどくなるばかりだよ。それに痛み出しそうな虫歯もたくさんあるし。すこしお口の臭いもあるようだね。いい、必ず歯医者さんで治療してもらってね。わかった？ はい、では次の人」

と真央にいったあと、真央の次の子の歯科検診に移った。

真央は、学校歯科医に注意されてさらに真っ赤になった。

“恥ずかしい……。どうしよう……。また虫歯増えちゃった。歯医者さん行かなきゃ……。でも歯医者さんコワイしい”

真央は小学校2年生のときに受けた虫歯治療を思い出し、恐怖感が甦った。

学校歯科検診が終わって1週間が経った。

真央は、担任の岩田みどり先生から、今年も当然のように『虫歯治療のお勧め』という『治療勧告書』を渡された。

「真央ちゃん。ここに書いてあるけど、ほんとにすぐ歯医者さんに治療受けに行ってね。虫歯はほおっておくと、悪くなることはあっても、よくなることは絶対にないから。だから早く歯医者さんに行って、ちゃんと虫歯の治療を受けてね。先生からもお願いね」

『治療勧告書』には、『いますぐ歯医者さんで治療を受けてください』という文字が躍っていた。

真央は恥ずかしさで赤くなりながら、小さな声で、
「はい」
と返事をした。けれどもこころの中では、
“歯医者さんコワイ……コワイよお～”
と泣きたい気持ちになっていた。

その日の学校帰りの道すがら、真央はコンビニのゴミ箱に『治療勧告書』を捨てた。母の姫乃に見せないためである。見せたら最後必ず歯医者に連れて行かれる。真央は、担任の岩田みどり先生や学校歯科医の説得にいったんは歯医者に行かなきゃと思ったが、やっぱり歯医者への恐怖感が優り、『治療勧告書』を捨てることにした。

そして1学期、夏休みはおろか、2学期となっても歯医者に治療を受けに行こうとはしなかった。小学校2年生で受けた虫歯治療がトラウマとなって歯科恐怖症となっていた真央だが、さらに今年の場合、春の学校歯科検診で前歯3本が虫歯と指摘されたため、もし歯医者に治療を受けに行くと前歯に銀歯を詰められると思いこみ、よけい歯医者に行けなくなってしまった。

そして迎えた2学期の終わり、その年の暮れ。もう12月もだいぶ押し詰まってきて、クリスマス、新年の準備にあわただしくなってくる頃の12月18日に、とうとう真央の虫歯が激しく痛み出した。

“さっき授業中に痛み出したときは、どうしようって、思っちゃった”
真央は学校から帰ると、ママにバレないように薬箱から痛み止めを取り出し、洗面台に来ていた。

“ほんとに痛み収まってくれないかな……。タベも痛くてよく眠れなかったし……”

そう思いながら、虫歯の痛みをおさえるために口の中に痛み止めを含む。次にコップに水をくみ、その水とともにバファリンを飲んだ。

ゴクッ。

「ううっ」

冬の水は冷たい。水が虫歯に染みて思わず声を上げてしまった。

「ふう～ん。痛たたた一つ！ くすん、くすん」

“歯に染みるう～。歯が痛いよお～！ くすん、よけい痛くなっちゃった……”

真央は虫歯の痛み、涙がポロポロッと零れ泣いてしまった。

「真央、歯が痛いんですよ」

背後から姉の声がしたので振り向くと、いつのまにか後に姉の詩乃が立っていた。詩乃は皓歯大教育学部附属高校に通う３年生である。来年の春からは皓歯大教育学部の入学が決まっている。秋に行われた学内の推薦入学試験に合格したのだ。詩乃は幼稚園から皓歯大の附属に通っている。いわばエスカレーター式に上級学校に進学してきているのだ。その姉は学校から帰ったばかりなので、グレー襟の黒のセーラー服にグレーのリボン、それに黒のプリーツスカートと紺色のハイソックスの制服姿である。まだスクールバッグも手にしている。

あわてて涙を拭う。

「えっ。そ、そんなことないよ。ちょっと頭が痛かっただけ」

「ほんとう？ わかった。真央、歯医者さん怖いんだ。恥ずかしいなあ、もう６年生のお姉さんのくせに……。怖くないなんて嘘ついてもダメだよ。ちゃんとわかってるんだから」

“お姉ちゃん、たしか、今日歯医者さんで治療受ける日のはず……”

そう思って詩乃の顔を見ると、目の周りを真っ赤に泣き腫らしたあとがある。

“お姉ちゃん、今日も歯医者さんで泣いたんだ！ きっとハンカチで頬を押さえながら歯医者さんの玄関から出てきたんだ！ よお～し”

真央は反撃に出た。

「お姉ちゃんこそ、虫歯だらけのくせに！！ 高校生なのにいつも歯医者さんで泣いてるじゃない！！」

詩乃は小さい頃から虫歯が多く、歯医者の治療を受けるたびに「痛い！！ 痛い！！」と毎回泣いていた。

「いったわね～！！ お母さん。おかあさあーん、真央ったら歯が痛いんですよってえ～」

「あっ！ ちょっとお姉ちゃん！！」

姫乃が洗面所にやってきて、恐い顔で、

「詩乃だけでなく、真央もなの？ ママにお口の中見せなさい」

といった。

「えっ。イヤだ！」

「いやだじゃありません。見せなさい！」

「だって～」

「だってじゃありません。ほら！」

目に涙を溜めた真央の口を強引に開けさせる。

「まあ！ こんな大きな穴が開いてるじゃないの！ 真央、ホントは痛いんですよ。泣いてるじゃない……。しょうがない子ね……」

姫乃がやさしく指で真央の目尻の涙をぬぐってくれた。

“ママに、わたしが虫歯痛くて泣いてるの、バレちゃった……”

姫乃に顎を押さえられ、口を開けたまま真央は思った。

「あっ、ここも。ここも虫歯じゃないの！ これは歯医者さんで治療してもらわなきゃダメね」

「えっ！ やだっ！！」

「やだじゃありません。ママが連れて行ってあげるから、明日学校終わってから歯医者さんに行くのよ。放課後迎えに行くからね。わかったわね」

「……」

詩乃は、真央が叱られるのを見て少しうれしそうな顔をしている。

「真央も歯医者さんだあ～。どうする真央お～。そんな大きな穴開いてるんじゃない、治療痛いよ。虫歯の治療が痛くて泣いちゃうよ」

詩乃は、いままで歯医者で治療を受けたことが比較的少ない真央がうらやましい。

「そんなことって。詩乃は大丈夫なの？ ちゃんと怠けず歯医者さんに行ってるの？ 今日治療だったんでしょ。あなたも虫歯がいっぱいあるんだから。ちゃんとフロスも使って歯磨きするのよ。先生にいわれたでしょ」

「はあーい、ママ」

「もうホントにふたりともしょうがないわね。女の子なのに虫歯だらけだなんてみっともない」

姫乃はおかんむりで、リビングの方へ戻っていった。

翌日。12月19日の火曜日。

キーン、コーン、カーン、コーン。

6時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

真央は憂鬱な気持ちで、教科書やノートをランドセルに片付けている。

“とうとう、放課後になっちゃった。ママに歯医者さん連れて行かれる……”

不安がどんどん募ってくる。

“くすん、コワイよお～”

紺色の帽子、紺色のブレザー（胸のところに校章のエンブレムの着いたポケットがついている）に紺色のベスト、丸襟の白いブラウス、紺色のプリーツスカートに白のハイソックスのつくし坂小学校の制服姿の真央が校門から出て来るのが見えた。

不安な気持ちのまま真央がとぼとぼと校門を出てくると、母の姫乃が待っていた。

“ママだっ！”

「さあ、真央。ママといっしょに歯医者さん行きましょ」

「えっ！ やっ！ やっ！ 歯医者さんやだっ！ 怖い！ 怖いよっー！」

「6年生のお姉さんがなににってるの！ さっはやく行きましょ」

姫乃は真央の腕を取って、いやがる真央をぐいぐいと止めてある軽自動車の方へひっぱっていった。

「やーっ！ やーっ！ もう虫歯治ったっ！！ ママ許してえーっ！！ 歯医者さん行きたくないっ！！ やだっ！！ やだっ！！」

時間は少し戻って、その日のお昼時。

『つくし坂歯科クリニック』は午前の診療を終え、院長の牧野あさ美先生の娘で歯科衛生士の百瑛子（もえこ）ともうひとりの歯科衛生士の悠城なおは、他の歯科助手2人とお昼を食べ終え仲良く談笑していた。

「そうだ！ ねえ、口腔写真の撮影練習しない？ 今までの一眼レフに替えて、これからはデジタルカメラの一眼レフになるけど、わたしまだ慣れなくて……」

「そうですね。ファインダーに変わって画面全体で見るのが難しいんですよね。やりましょう、百瑛子せんぱい！」

歯科助手2人も頷いている。

「じゃあ、あっちのユニットになおちゃん、座って」

「えっ！？ わたしがですか……？」

「そっ、なおちゃんが患者さん役」

「えーっ！ 百瑛子せんぱい、ずるーい」

「文句いわないで。次はわたしが患者さん役やるから、ねっ！」

「はあ〜い」

なおがいよいよながらに返事をしてユニットに腰掛けると、早速に水色の歯科エプロンがつけられ、口角鉤を持たされる。

「はい、撮るわよー」

正面の上顎歯と下顎歯をかみ合わせた状態を撮影したあと、今度は開口器を填められ、さらに口腔内にミラーを入れられ、上顎、下顎の撮影をする。

撮影が終わったのに、百瑛子はまだなおの口を開けさせたまま、なおの口の中を診ている。

「へんはひ。ふひ、ははひほはんへふひょお〜」

なおが文句をいっている。おそらく“せんぱい。次、わたしの番ですよお～”といっているらしいのだが、百瑛子は耳に入らないかのように、熱心になおの口の中を診ている。

「ねえ、ここちょっと穴が開いて、虫歯になってない？」

「そういえば……。少し変色してますね」

「ええ、少し虫歯が進行してそうですね」

「なおちゃん。なおちゃんたら歯医者に勤めているくせに、銀歯の横に穴が空いているわよ～」

百瑛子は、横の歯科助手2人と、なおの口の中を執拗に診ている。

「へへ～。ははひふひははんへ、はいへふひょお～。ひゃんほはひはひひへはふひ～」

なおは“ええっ。わたし虫歯なんてないですよ～。ちゃんと歯磨きしてますし～”と開口器をつけたまま抗議する。

ちょうどそこへ、あさ美先生が通りかかった。

「なにしてるの～？」

「あっ、おかあ、じゃなくて、院長先生。ねっ院長先生、ここ虫歯になってないですか？」

「どれどれ」

「ねっ、茶色くなってません？」

「……ええ。ほんとね、虫歯ね。ほかにもちよこちよこ虫歯になってるわね。そうね～、ざっと診て5～6本は虫歯があるわねー」

「でしょう？」

「へへっ！？　ほんはひー」

「歯科衛生士が虫歯あったんじゃしょうがないわね。まだ午後の診察時間まで1時間近くあるし、なおちゃん治療しちゃいましょう。百瑛子、手伝って」

「はい！　院長先生」

百瑛子がうれしそうにいう。

「へへ～～～～っ！　ほんはあ～」

「そんなに深くはないと思うから、麻酔なしで削っていくわね」

「えっ！？」

なおが思うまもなく、すぐさまなおの口腔内にあさ美先生の持つタービンとデンタルミラー、百瑛子が持つバキュームとスリーウェイシリンジが挿入され、タービンがなおの虫歯を削りだした。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「あがががあー。痛っ痛っ痛あーい！！」

「痛いよ～、痛いよ～」

となおはもがいてうったえる。

「う～ん、痛いわね、これは痛いねえ～、かなり深いわよお」

「でもね～、衛生士なのに、虫歯つくっちゃって、なおちゃん恥ずかしいと思わない？ 少しはがまんしなさい！！」

あさ美先生がなおに注意するが、なおは、

“そんなこといったって～。痛いものは痛いつ！！ そんなに容赦なく思いっきり削らなくたって……。ううそ～ん、ここぞとばかりにわたしのこといじめてるでしょ～”

と口を開けて虫歯を治療されながら、涙目で虫歯を削る痛みを耐えていた。

「そうよ、なおちゃん。もうちょっとがんばらないと。なおちゃんの受け持ち患者さんに笑われちゃうよ」

百瑛子は自分自身が歯医者が苦手なのにもかかわらず、涼しげな顔でなおにいった。

“なによ百瑛子せんぱいまで～。せんぱいだって、歯医者さんの娘のくせして歯医者さん苦手のくせに～い”

「麻醉なしだけど、もう少しがんばってね～」

なおの虫歯を削りながら、あさ美先生は楽しそうにいった。

“ふう～、なんとか麻醉なしでがんばれた……。削ったところがまだジンジンするう～”

ようやくなおの虫歯の切削治療が終わり、その日は土台のセメントを詰めて終わった。

「今日はここまでね～。明日、また続きをやりましょ」

あさ美先生がうれしそうな顔でニコニコしながらいう。

“はあ～、また明日削られるんだわ～～” とため息をつきたい気持ちで、なおは思っていた。

「今日の午後の予約は何人？」

なおはまだジンジンする頬を手で押さえながら、

「はい、先生。午後は、再診の方が10人で、初診の方は1人ですね。初診はつくし坂小学校6年生の紺野真央ちゃんという女の子です。お母さんが電話で予約されてきた方です。お母さんのお電話の話だと、虫歯が痛み出したみたいです。痛む虫歯以外にもだいぶ虫歯が多くて、全部治療することを希望されますね」

と予約表を見ながらいった。

「そう。ちょっと治療が大変かもしれないわね。なおちゃんよろしくね」

あさ美先生は、どうやら、真央の担当歯科衛生士をなおと決めているようだ。

「はい、先生」

「よし！ さー、みんな午後からもがんばってね」

「はあーい、先生」

スタッフから元気な声が上がった。

真央は、姫乃といっしょに『つくし坂歯科クリニック』の待合室のソファーに座っていた。真央は紺色のブレザーに紺色のベスト、それに丸襟の白いブラウス、紺色のプリーツスカートに白のハイソックスというつくし坂小学校の制服姿。真央の横には通学の時に被っている紺色の帽子と赤のランドセルが置かれている。真央が逃げ出したりしないように、姫乃はしっかりと真央の腕をつかんでいる。治療を前に不安と恐怖で俯き加減の真央……。

待合室には、3人の患者が待っていた。みどりヶ丘中学の制服を着た女子中学生。仕事を早退してきたのだろうか、頬を押さえたOLらしい20代と思われる若い女性。つややかなセミロングの栗色がかった髪に白のブラウスにベージュのミニのタイトスカートを身につけている。普段は凛々しく颯爽と歩いているのだろうが、いまは歯の痛みで顔をしかめているためか、かえってその姿が痛々しい。さらに真央と同じ歳くらいの小学生らしい女の子も治療の順番を待っている。その子も母親に付き添われている。

“あっ！ 薫”

その子と目があった。真央とクラスメイトの夏野薫は、真央に軽く会釈すると、憂鬱そうな目をすぐに伏せてしまった。

みんな真央と同じく、一様に不安そうな顔をして俯き加減だ。

診察室の中からは、ひっきりなしに歯を削るタービンの音が聞こえる。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュ、キュ、キュイ、キュイ、キイーン。

ときおり、患者のうめき声と先生や衛生士の励ます声が混じる。

「んうっ、んんっ。いはあ……いいはああ……いいはああ……」

「はい、大丈夫だよ～。もう少しがんばってね～」

「お口閉じちゃダメだよ～。もうちょっと我慢しようね～」

「すぐ済むからね～」

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイ、キュイ、キイーン。

「んんんんんーんっ。ひいいひいい。いがっ！ ひはい！！ ひはい！！ うわああーん」

「はあーい、もう少しがんばって～」

その音と声が、待合室で待つ真央をはじめ患者の不安をいっそう掻きたてる。〇Ｌの女性は虫歯が痛むのだろうか、ハンカチで頬を押さえている。〇Ｌはタービン音と患者の泣き声が聞こえるたびに不安そうに目を泳がせる。

「ねえ～、ママー。治療痛くないよね？ 大丈夫だよ？ ねえ、ママー」

真央は、込み上げてくる不安から、姫乃のからだを揺すって尋ねている。

「しっ。おとなしく待ってなさい。真央ったら、なにいつてるの！ もう６年生のお姉さんでしょ！ おとなしくしなさい！ ほら、他の人が笑ってるわよ！」

「だって……」

「だってじゃありません。ほんとにもう……、こんなになるまで虫歯をほおっておくなんて！ いい、ちゃんと我慢して治療受けるのよ。わかった？」

“だって、わたし歯の治療怖いんだもん”と姫乃にうったえようとしたのだが、姫乃は真央の発言に覆い被せるように言葉を重ね、真央に治療を受けるように釘を刺した。

カチャ。

いつのまにかタービンの音が止んで、診察室のドアが開き、順番を待っていた〇Ｌが呼ばれた。〇Ｌはこれから始まる虫歯治療に不安感を隠せず、のろのろと立ち上がり、重い足取りで中へ消えていった。

〇Ｌが入ったあと、しばらくして、もう一度診察室のドアが開き、セーラー服を着た女子高生が出てきた。姉の詩乃が通う皓歯大教育学部附属高校の制服であるグレー襟の黒のセーラー服にグレーのリボン、それに黒のプリーツスカートと紺色のハイソックスの姿である。

女子高生はよほど治療が痛かったのだろうか、目に涙を溜めて頬が赤く泣き腫れてて、痛そうに頬をハンドタオルを持った手で押さえている。黒のプリーツスカートはしわくちゃになっている。ヘッドレストでいやいやをしたためであらうか、きれいな黒髪も乱れている。

「見なさい、真央。みんなちゃんと我慢して治療受けてるのよ。あのお姉ちゃんだってそうよ。えらいわね～。治療が怖いなんて、真央恥ずかしくない？」

「……でも、あのお姉さん、泣いてるよ」

また虫歯を削るタービンの音がキューーン、キューーン、キューィーーンと聞こえてきた。同時にいま入っていった〇Ｌの声だろうか、呻き声と泣き声が聞こえてくる。

「ふうん、ふんふん、クックッ」

“いま入っていったお姉さん、どんなことされてるの？ ……ああ、ヤダなあ
あの音……。コワイよお～”

時折タービンの音がとぎれながら、15分ほど虫歯を削るタービンの音が聞こえていた。

それからしばらくすると診察室のドアが開き、淡いグリーンのナース服とナースキャップ、淡いピンクのエプロン、それに白いナースシューズの歯科衛生士の悠城なおが顔を出し、

「紺野真央さあーん、真央ちゃあーん。診察室にお入りください」
と真央の名前を呼んだ。

なおはエバーマスクと黄色いラテラックスグローブをつけ、もう真央の治療体勢にはいつている。

「ほら！ 真央、呼ばれたわよ。はやく歯医者さんのお姉さんのところへ行きなさい！ ほら、これ持って！」

姫乃はトートバックからハンドタオルを取り出し、真央に渡ししながら、治療室に入ることを促した。

「ママー」

「どうしたの？ 早く行ってらっしゃい」

「ついてきてくれる？」

「なにいつてんの！ もう6年生のお姉ちゃんでしょ！ さあ、これ持って！ 早く行きなさい！ 歯医者さんのお姉さんが待ってるでしょ」

姫乃は、診察室のドアを開け微笑みながら真央を待っている歯科衛生士のなおを見ながら、真央にハンドタオルを持たせ、治療室に行くようもう一度促した。

真央はいやいやながらにハンドタオルを受け取ると、

「はい」

と小さな声で返事をしてのろのろと立ち上がり、なおのいる診察室のドアのところへ向かう。

「真央ちゃん、大丈夫だよー。お姉ちゃんといっしょに行こうねー」

そんな真央を見て、なおがにこやかにいう。

真央はコワイ気持ちを押えて、トボトボと治療室のドアに向かって歩いていく。

「はあーい、こっちよ～」

なおは真央の背中に手を回し、労るようにしてふたりして診察室の中に入っていた。

名前を呼ばれて入った診察室の中、真央はなおに歯科治療ユニットに案内されていく。治療ユニットは全部で4台あった。どのユニットも淡いパステルピンクに統一されている。

真央はドアから一番奥のユニットに誘導されていったが、ドアから2台目のユニットでは先ほどまで虫歯を削られていたOLが、根管治療を受けている。牧野あさ美先生がリーマとファイルを使って、OLの虫歯に歯内療法を施していた。

OLは根管治療が痛いのか、
「ふうん、うん、うん。いあ～、いはあ～」
と時折うめき声を上げており、そのたび歯科衛生士の牧野百瑛子に、
「大丈夫ですよ～。もう少しがんばって～」
と励まされていた。

OLは目尻に涙を浮かべ、手に持ったハンカチを握りしめ、根管治療の痛みを耐えている。スカートはしわくちゃになっていた。さらに足のつま先はのび、脚はピクンピクンと動いている。

「いがっ！！」
あさ美先生のリーマがOLの虫歯の根管の深いところを抉ったのだろうか、OLはひときわ大きな声をあげ、膝を立てた。タイトのミニスカートのベージュのストッキングに覆われた太ももの間から、OLのピンクのショーツがチラチラと見える。
「はあーい、もう少しがまんしてくださあーい。もうすぐ終わりますからね～」
「いはああ……、いはああ」

終わりの見えそうにない治療に、OLはとうとうポロポロ涙を零しだし、口からは唾液を漏らして、さらに額には脂汗を浮かべながら、必死で虫歯治療の痛みを耐えている。手にした若い女性らしいハンカチは、OLが治療の痛みを耐えるたびに握りしめられ、しわくちゃになっている。ユニットの穏やかなカラーとは対照的に過酷な治療である。

真央はその光景にさらに怖い気持ちが増していった。
「治療で汚れるといけないから、上着脱ごうね～」
そういつて、なおは真央から上着を脱がすと、ユニットのそばのハンガーに掛けた。

「ここに座ってくれるかな～」
なおが真央に微笑みかけながら、ラテラックスグローブをはめた手で治療ユニットを指差した。

真央を見おろすかのようにギロリと光るハロゲンライト。ブランケットテーブルにのっている銀色に光る探針、デンタルミラー、エキスポローラー、ピンセット、ストッパー、スプーンエキスカバーダーなどの痛そうな治療器具の数々。口腔内を写し出すシャーカステン。鋭く尖ったダイヤモンドポイントやタングステンカーバイドの入っているバー・チャージャー。銀色に鈍く光るコントラハンドピース。ホースのついたエアタービンや電気エンジンタービンはブランケットテーブルについている。さらに歯科衛生士の使うバキュームやスリーウェイシリンジの類。スπιトンのところにある銀色のうがいコップ。

どれもこれもこれから真央が受ける痛い虫歯治療を暗示しているかのようだ。

それを見たたん、小学校2年生の頃大泣き大暴れして受けた虫歯治療のドリルや无影灯の光景が、真央のあたまの中に鮮明に甦った。それまでなおに案内され、素直に治療ユニットに座ろうとしていた真央だったが、とたんに恐怖心がわき上がり、抵抗し始める。

「やだー！ 歯医者さんやだっ！」

「どうしたの？ 真央ちゃん。大丈夫だよ。治療痛くないよ」

なおが笑顔で真央を宥める。

「やだっ！ 治療台のりたくないっ！」

だが真央は、ユニットの横にしゃがみ込んで、治療台に座るまいとして激しく抵抗する。

「ホントに怖くないよ、真央ちゃん」

なおはやさしく真央を説得するが、真央は、

「やだっ！ やだっ！ コワイ！ コワイ！」

と聞き入れない。

困り果てたなおは、先輩の歯科衛生士の百瑛子に目配せをして、助けを求めた。

百瑛子は担当していたOLの診療補助がほぼ終わっていたので、あとを歯科助手に任せ、真央のところへやって来た。

「どうしたの？ 治療、怖くないよ。さあ、おいすに座ろうね～」

「大丈夫よ～、真央ちゃん。お姉さんたちがついてるじゃない」

ふたりがかりで真央を宥め、ようやく治療ユニットに座らせる。

「エプロンつけますね～」

なおがにこやかに真央の胸元に水色の歯科エプロンをつけようとする、真央の緊張がふたたび高まり、

「やだっ！ エプロンしないでっ！」

とからだを振り、激しく抵抗する。

「大丈夫！ 大丈夫だよ、真央ちゃん。なんにも痛いことしないよ」

「こわいっ！ こわいっ！ お母さん助けてっ！」

「やだっ！ やだっ！ お口開けないっ！ キューンするからお口開けないっ！ やだっ！ やだっ！」

涙を流し、足をパタパタしながら、真央は抵抗する。その真央を百瑛子が抑えつける。さらにあとひとりの歯科助手もやってきて、3人がかりで抑えつける。

「なおちゃん、はやく先生呼んできて！」

「先生呼んできますからね～。少し待っててね～」

なおは足早にあさ美先生を呼びに行った。

真央は小学校2年生の時に受けた歯科治療がトラウマとなって、歯科恐怖症になっていたため、あさ美先生、歯科衛生士のなお、百瑛子が開口を促してもどうしても口を開けようとしない。ユニットの上で、おびえた目をしてイヤイヤをするばかり。

とうとうあさ美先生は、その日の治療をあきらめ、

「真央ちゃん、そんなに治療怖い？」

と真央に聞いた。

涙に濡れた目をして泣き顔でコクンとうなずく真央。

「わかった。今日は治療しないよ。そのかわり……」

真央の目が不安で見開かれる。

「あっちのお部屋で、このお姉ちゃんとお話ししてくれるかなあ？　ほんとは、せんせい、真央ちゃんとお話ししたいんだけど、ほかの患者さんの治療があるから、代わりにこのお姉ちゃんといっぱいお話ししてほしいんだ～」

あさ美先生が、エバーマスクを外して真央にいう。

「真央ちゃん、お姉ちゃんとお話しよ。ねっ！」

百瑛子もにこやかに真央を説得する。

「はい……」

真央は小さく返事をする、歯科衛生士の百瑛子に連れられ、いっしょに治療室の片隅にある相談室に入ってしまった。

第3章 歯医者さんの娘のくせに

真央を相談室に連れて来た百瑛子（もえこ）は、23歳。聖ハイジエニア歯科衛生短期大学を卒業して歯科衛生士国家試験に合格した。母のあさ美は歯科

医で、そのあさ美が経営する『つくし坂歯科クリニック』で歯科衛生士をしている。百瑛子は歯医者娘にもかかわらず、小さい頃から虫歯に悩まされ、母のあさ美の手で痛い虫歯治療をさんざん受けてきた。だから本当は歯科関係の仕事につくのはいやだったのだが、結局、短大の歯科衛生学科を出て歯科衛生士となってしまった。皮肉にも自分が受けてきたつらい治療の経験から、患者にやさしい歯科衛生士としてなかなか人気がある。

今日も患者に歯科エプロンをつけながら、患者をリラックスさせようと話しかける。

「治療やですよえー。痛いでしょ～、そうですね、私も歯医者大っキライです」

「歯医者に勤める私が、歯医者大っキライときたもんだから、おもしろいでしょ」

百瑛子となおが患者に得意のセリフをいっている。

「またあ～、あなたたちはそんなことってえ～……。ホント不届き者ね～」

あさ美先生が注意するが、目は笑っている。こんなやりとりで、診察室は和やかな雰囲気にも包まれる。

『つくし坂歯科クリニック』では、真央のような歯科恐怖症の患児が来たときは、患児をリラックスさせて、治療がスムーズに受けられるように、百瑛子がカウンセリングを担当している。

相談室のいすに真央を腰掛けさせ、百瑛子は、つくえを挟んで向かい側のいすに座った。

「真央ちゃん、そんなに歯医者さん怖い？」と聞いた。

真央は、小さくコクンと頷いた。

「真央ちゃん。真央ちゃんが歯医者さん怖くなっちゃったわけ、お姉さんに教えてくれるかなあ～」

「……」

「治療、痛いからかな？ それとも歯医者さんの使う金属の器具、たとえばタービンとか、先端の尖ってるものが怖いのかな？ お姉さんにお話ししてくれないかなあ～」

「……」

「恥ずかしいのかな？」

「……」

真央はうつむいているばかり。

“歯医者さんコワイ……。でも、もう6年生なのに歯医者さんがコワイなんて、恥ずかしい……。それに2年生の治療台でのおもらし……。恥ずくて恥ずかしくて話せない……”

「恥ずかしいかな？　じゃあ、最初にお姉さんが歯医者さんで受けた治療の経験を話すわね。お姉さんの話を聞いたら、真央ちゃんもお話ししてくれる？」

真央は思わず顔を上げた。やさしく百瑛子が微笑んでいる。コクンと頷いてしまった。

「ホント？　約束だよ。はい、指切りね」

ふたりで指切りをする。

「それじゃあ、わたしのこと話すわね。何から話そうかな……」

百瑛子は少し考えてから、

「真央ちゃん、わたしの名札見てみて。ほら、ここに『牧野百瑛子』って書いてあるでしょ？」

と淡いグリーンของ ナース服の上につけている淡いピンクのエプロンの胸元を指した。

コクン。

と首を縦に振る真央。

「名字を見てくれればわかると思うんだけど、わたし、院長先生、牧野あさ美先生のことね、先生の娘なの。歯医者の娘ね」

そういいながら、百瑛子はいたずらっぽい目で真央を見つめ、

「だけどね、真央ちゃん。わたしも歯医者大っ嫌いなの。歯医者の娘のくせにおかしいでしょ……」

といった。

真央は、百瑛子の思いがけないことばに、ビックリしたような目で百瑛子を見つめた。

「真央ちゃん。わたしもね、小さい頃から甘いものが大好きだったのよ。いまでも好きだけど。だけど歯磨きは大嫌いだったの。それで虫歯が多くてねー。いつも歯が痛い、歯が痛いよお、って泣いてたわ。でもね、真央ちゃん。母が歯医者やってるでしょ。治療イヤなんだけど逃げられないのよね。治療せずに済ませられないのよ。ママに無理矢理治療ユニットに座らされて、時にはベルトで縛られて、おきまりの痛い治療……。虫歯をキューーンって削る治療をされてはワンワン泣いてたわ。それでますます歯医者が嫌いになっていったの。歯医者大っ嫌いだったわ……。真央ちゃん、わたし虫歯を治療した痕がいっぱいあるのよ。ほら」

百瑛子はやさしい目で真央に語りかけ、口を開けて、真央に口腔内を見せる。インレーやクラウンの虫歯の治療痕がいっぱいあり、百瑛子の口腔内は銀歯でギラギラ光っている。前歯は裏側が金属の差し歯だった。

「！？」

真央は驚いたような顔をしている。

「ねっ。真央ちゃん、わたしの虫歯治療の経験はね……」。

うーん。痛いっ！ スー スー。空気吸っても、痛い止まらないなあ。しょうがないっ、保健室行って薬もらおう……。

あっ、彩香だ。

「なあんなの、百瑛子。まあ一た、歯が痛いの？ ほっぺ押さえちゃって」

「うん。……さっきから痛み出しちゃって……」

「百瑛子、ほんとに歯が悪いね～。歯医者さんの娘のくせに！」

「そういう彩香だって、虫歯いっぱいあるじゃない！ 歯医者さんの娘だって、虫歯ぐらいなるわよ！ それに整形外科医の娘だってブスはいるじゃない！」

彩香は、井上っていうの。きついことをいってるようだけど、ホントは私の親友。彩香、これでも心配してくれているんだあ。私、わかってるの。

私は、牧野百瑛子。パパは皓歯大学歯学部口腔外科の教授。ママは歯科医で、家をつくし坂歯科クリニックを開業しているの。パパは東都医科大学を出て皓歯大の大学院に進み、ママと出会ったの。ママは皓歯大学歯学部から皓歯大の大学院の進んで、ふたりが講師をしていたときに結婚したの。で、ママは私を生んでから大学をやめて開業したってわけ。彩香は近所に住んで、小さい頃からうちの患者。治療が痛くてワンワン泣いてたの見たことある。

「百瑛子、ついてってあげる」

「うん、ありがと」

小さい頃、パパもママも忙しくて、特にわたしが3歳の頃、パパがアメリカの大学の歯学部留学することになって、パパもママもアメリカにいった。その間、私のことはお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが世話してくれたんだけど、お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも私のいうことやわがママも全部聞いてくれて、甘やかされて育っちゃった。お菓子は食べ放題、ジュースも飲み放題。大好きなキャンディーやチョコレート、ケーキをいっぱい食べてちゃって、虫歯だらけになっちゃったのが、幼稚園の年少さんのとき。その頃、パパが1年半の留学を終えてママといっしょに帰ってきたの。

で、私は虫歯が痛くなっちゃって、はじめての虫歯治療。

「ぐすん、わーん、ママー、歯が痛いよー」

「もう、しょうがないわね、歯医者さんの娘なのに！ はやくこっち来なさい！」

ママが私を診察室に連れて行く。治療機械や治療器具がいっぱいの、診察室はコワイ。私と同じくらいの年の子が泣きながら治療されてるのをのぞき見たこともあったから、とっても怖かった。そうそう、彩香はその頃はじめてうちのママの治療を受けて、大泣きして暴れるのでレストレーナーで縛られてたっけ。

「やだやだっ！！ もう虫歯治ったっ！！」私は、怖くなり診察室を逃げ回ったの。

「ダメ！！ 百瑛子、こっち来なさい！！」

でも、結局歯科衛生士のお姉さんにつかまって、治療台にベルトで縛りつけられた。

そして、強烈なライトが私の口元にあてられたの。

「百瑛子、口開けなさい！」ママが怖い顔をしていう。

「うっうっ」怖くて、私は涙が出そうだった。口を閉じたまましていると、ママが「百瑛子、ちゃんと口開けなさい」と叱った。衛生士のお姉さんが私の口を無理矢理開けると、ママが開口器をはめた。

「こんなに虫歯にして！ ママ、恥ずかしいわよ」

「さっ、治療始めるわよ」

キューーンって、私の虫歯が削られる。

「うわあーん、痛いつ痛いよ〜」

「虫歯つくっちゃった百瑛子が悪いのよ。少しはがまんしなさい！」

治療が痛くて私が暴れると、衛生士のお姉さん4人に抑えつけられた。大泣きしながら、なんとか治療は終わったんだけど、それ以来歯医者さんの娘なのに、大の歯医者嫌い！

けれど、歯医者さんの娘がわざわざいして、治療すっぽかすこともできず、おまけにママはうちの学校の学校歯科医でもあるし……、もう、最悪！！

一度、高校2年生の頃、ママの治療が嫌で他の歯医者さんに行ったの。

治療台で、キューーンと削られて歯の型取りをしてしばらく待っていたとき、その歯科医院のスタッフが、

「あの女の子、まだ高校生なのに下の前歯4本以外、全滅してる。親不知も生えてる途中でもう虫歯になってる」

「それに保険証見たけど、歯医者さんの娘みたいよ」

「えーっ、ホントに！？」

と影でいって、隣の治療台の女の人がくすくす笑ってるのみて、凄い恥ずかしくて、耳たぶから頬が真っ赤になっちゃった。それ以来、他の歯医者さんはいってない。ママの治療、痛いから嫌なんだけど、もうあんな恥ずかしい思いはしたくないよ。

「せんせい、痛み止めにいただけませんか？」

保健室のドアを開けながら、私は保健の先生にいった。そばにはついてきてくれた彩香がいる。

「なんなの？ また歯が痛い、牧野さん。この前、痛いつてきたとき、お母さんに治療してもらいなさいっていつてたでしょ？ 治療、受けてないの？」

「はい……、すみません」

保健の平田先生は、うちのママが講師をしている聖ハイジエニア歯科衛生短期大学の卒業生で、養護教諭の資格をとったあと、歯科衛生士の資格をとってわけ。ママの歯科医院で実習をしてたこともある。しかもよりにもよってうちの学校の保健の先生になるなんて……、ほんとにもう。

「しょうがないわね、牧野さんは……、はい。いい、今度こそちゃんと治療受けるのよ。治療しないと、虫歯は絶対治らないんだから」

「はい」私は赤くなった。

横で、彩香がくすくす笑ってる。

その日、家に帰ったのは午後4時頃。痛み止めもらって飲んだけど、ちっとも効かない。しょうがない、治療してもらおうか……。

受付に行って、助手の高橋さんに聞こうと。

「今日、あと何人の方はいつてる？」

「あら、百瑛子お嬢さん、また歯が痛いんですか？」

「しっー！ ママに聞こえたら、まずいじゃない！ それにお嬢さんっていうのやめて！」

「もう、聞こえてるわよ」

あっ、ママだ。せっかく久美子先生にあとでそっと治療してもらおうって思っただのにい……。

「しょうがない子ね。私、今の患者さんで今日終わりだから、百瑛子を診てあげるわ」

「えっ、まだいいよ。あとでいいよ」

「ダメ！！ こっちいらっしゃい」

ママが私の手をひっぱり、診察室の中に連れてかれた。

「ママ、忙しいんでしょ。私、そんなに痛くないから、あとでいいよ。それより他の患者さん診てあげて、ねっ、ママ」

「そんなことって、また治療受けなつもりでしょ。ダメよ」

ママの治療、痛いんだもの。容赦しないんだから、いやだなあ〜。

「で、どの歯が痛いの？」

私が口開けられずにもじもじしていると、

「いまさら、恥ずかしがったって……。百瑛子が虫歯多いのは、わかってるんだし……。ママの責任でもあるんだから、さっ、アーン」ってママはデンタルミラーと探針を構えているの。

そうね、いまさら隠しようもないし……。

「まあ、前歯のレジンの詰めもののところから、大きく虫歯が広がってるじゃない……。それも3本も……。ほんとに百瑛子ったら、もう」

「はあ〜、しょうがないわね〜。……。これは、神経をとらないとだめね」

えっ、また神経の治療しなきゃいけないの！？ ママが、私の歯を診察しながらいう。はあ〜、ため息つきたいのは、ママじゃなくてこっちだよ。なんで、歯が弱いのかなあ〜、はあ〜。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

私の前歯が削られていく……。奥歯、抜髄してたり、インレーやクラウンなんかの詰めものだらけの口腔だったけど、さすがに前歯をなくなるくらい削られると、涙……。半泣き、半べそ……。

というわけなの。だから真央ちゃんもわたしみたいにならないよう、がんばって治療受けよ。きっと笑顔ときれいな歯を取り戻せるから。わたしもなおちゃんも、もちろんあさ美先生も真央ちゃんの味方だよ。治療がんばって、真央ちゃんの虫歯をやっつけちゃおっ、ね」

百瑛子が笑みを絶やさず、しかしながら真剣な目で真央を諭す。

真央は、百瑛子の話を聞いて、

「お姉ちゃんが虫歯の治療されてるとき、いつも泣いてて……。わたし……。怖くなっちゃって……。それに小学校2年生のときに受けた治療が凄く痛くて、おもらししちゃって……。それで歯医者さんが怖くなっちゃって、治療行けなくなって、虫歯ほおったままにしちゃって……。そ

れでどんな治療されるのかって思うと、余計、治療に行けなくなっちゃって……。くすん、えっ、えっ」

と泣きながら、小さくいった。

「そう。真央ちゃん、前に痛い治療受けたんだ。つらかったね。もう泣かないの。ねっ、泣きやんで。でもいま話したとおり、わたし真央ちゃんや真央ちゃんのお姉ちゃんの気持ち、よ〜く分かるよ。そうだよね〜。治療痛いものね」

真央は涙目でコクンと頷いた。

「先生たちは、……看護婦さんといっしょ？ 看護婦さんが『白衣の天使』なら、歯科衛生士さんの百瑛子先生やなお先生は、『歯の天使』なの？」

「そうよ〜、『歯の天使』よ。だから治療がんばろ」

「うん」

「それと……、真央ちゃん」

百瑛子が真央を見つめた。きょとんとした目で百瑛子を見返す真央。

「次は……、ちょっとがんばって、真央ちゃんひとりで歯医者さんに来られないかなあ……」

それを聞いて、サーッと青ざめる真央。

「大丈夫だよ。わたしがついてるじゃない！ ちょっとだけ勇気出してみよ、ねっ！」

百瑛子にいわれて、真央は思わずコクンと頷いてしまった。

「よしっ！ えらいよ、真央ちゃん。きょうはこれでおしまいね。真央ちゃんの虫歯が痛むといけないから、あさ美先生がお薬を処方してくれるわ。待合室で待っててね」

「じゃあ、真央ちゃん。次は25日の月曜日、午前10時に来てね。待ってるからね」

百瑛子が笑顔で見送ってくれる。

「真央ちゃん、きっと来てね。待ってるよ。お大事にね」

なおも明るい顔でいう。

真央は、その日はカウンセリングを受けただけで家に帰った。あさ美先生が頓服とロキソニンを処方箋に書いてくれ、姫乃に連れられて、途中で『つくし坂薬局』に立ち寄り、痛み止めのロキソニンを買った。

『つくし坂薬局』を出て、姫乃がいった。

「いい、真央。25日はちゃんとひとりで歯医者さん行くのよ。先生、待っていらっしゃるからね。わかった？」

こわごわながらも、真央は姫乃に向かってコクンと頷いた。

そして25日、クリスマスの朝である。時計は午前9時20分を指している。
「真央、もう時間よ。歯医者さん、10時からでしょ」
姫乃が2階に声をかける。

2階の真央と詩乃の部屋では、真央がのろのろと支度をしていた。
“はあ～、行きたくないなあ～。はあ”
「真央、ママ呼んでるよ。はやく歯医者さん行きなよ」
詩乃が真央にいう。詩乃はきのうで今年の治療が終わっているの、きょうは通院しなくてよく、余裕の表情である。
「うん」
“お姉ちゃんは、きょう歯医者さん行かなくていいんだ……”
真央はちょっとうらやましい。
「元気ないなあ。大丈夫だって、わたしでもがまんして虫歯治してるんだから。
真央、知ってるでしょ。わたしいつも半ベそで治療されてるってこと」
コクン。
真央は詩乃に頷いた。
「すぐ済むよ。ほんと大丈夫！ さあ、真央行ってきなよ」
「うん」
真央は詩乃に促され、トントンと階段を降りていく。

「なにやってたの？ 遅れるわよ」
姫乃が真央にいう。
「ねえ、ママ。歯医者さんついてきて」
「またこの子ったら。このあいだひとりで行くって、歯医者さんのお姉さんと約束したんでしょ」
「う、うん」
「じゃあ、がんばって行ってらっしゃい。4月からは中学生なんだし、甘えてちゃダメよ。ほら！ 診察券持って」
背中を押されるように、家を出た。

真央は予約時間の10分前に『つくし坂歯科クリニック』についた。2～3人のひとが待合室のソファに掛けて、治療の順番を待っている。みんな治療を前に憂鬱そうだ。
「真央ちゃん、こんにちわ」
歯科衛生士のなおが受付から、真央にあいさつした。
「あっ、こ、こんにちわ」

「百瑛子さん、いま、あさ美先生の診療補助の最中なの。もうすこし待っててね」

「は、はい」

「あっ、診察券預かせてね」

なおに診察券を渡す。

「じゃあ、真央ちゃんの順番来たら呼ぶからね。ソファで待っててね」

「はい」

ソファで待つ間も、ひっきりなしに虫歯を削るタービンの音が聞こえる。時折、女の子の呻き声と泣き声が混じっている。

キューン、キューイ、キューイ、キューーーン。

キュ、キューイ、キューイ、キューーン、キューイキューーーン。

“やだっ、あの音。コワイよお～”

タービンの音を聞くだけで、小学校2年生のときに受けた痛い治療を思い出し、胸がドキドキしてくる。

「ふうーん、ふんふん、はだぁ～い！ いがっ！ いがっ！ あぁぁ～」

「麻酔してるからそんなに痛くないでしょ！ もうちょっとだから我慢して！」

「いだいでふ！ いだいでふ！ あぁぁ～いがっ！ いがっ！ せんせえ～いだっ！ いだっ！ イダァーイ、イダァーイ！！ イダァイヨォ～イダァイヨォ～！！」

「神経の治療なんだから少しは痛いのは、当たり前でしょ！ 少しは我慢しなさい！ こんなになるまでほっとくなんて！ こんなになる前に治療してれば痛くないのよ！ 口もって開けて！ ほら！ 動かない！」

「はぁーん、うわぁーん。ひはいっ！ ひはいっ！ ひいいひいい」

「ほら！ 泣かない！ がまんして！ 高校生なのにみっともないわよ！」

治療室から、いま虫歯治療を受けている女子高生の泣き声と、女子高生を叱るあさ美先生の声が聞こえてくる。

“いま治療されてる子、あんなに泣いてる……。きっとすごく痛いんだ。やだなあ、キューンやだっ。コワイよお～。こわくて涙出てきたよ”

真央の目に大粒の涙が浮かんでくる。これから受ける治療のことを考えると、真央の胸はドキドキしてきて、憂鬱な気持ちでいっぱいになる。ますます泣きべそをかきそうだ。

治療室からは、治療の音がさらにエスカレートして聞こえてくる。

“くすん。……痛いのがやだっ。キューーーン、コワイよお～”

涙に曇る目を手で拭い、顔を上げると、なんと受付には誰もいない。

“……コワイ。……そうだ！ いまのうちに帰っちゃおう……”

急いでカバンを持ち、ソファから立ち上がる。受付の向こう側、すなわちあさ美先生、百瑛子やなおたちの歯科医療スタッフに気づかれないように、そっと玄関に向かう。

スリッパを脱ぎスニーカーを履いて、玄関の自動ドアのマットを踏もうとしたそのとき、カチャッと診察室のドアが開く音がした。背後から、真央の治療の順番が来たことを告げるなおの声がした。

「真央ちゃあーん、紺野真央ちゃあーん。診察室にお入り……、あっ」

真央は、いままさに『つくし坂歯科クリニック』の玄関を出て行こうとしていたところだった。

「あっ！ ちょっと！ 真央ちゃん、帰っちゃダメだよ。真央ちゃん！ 治療しないと！ 治療はどうするの！ また虫歯痛くなっちゃうよ！ 真央ちゃん！ 真央ちゃんたら！」

なおが呼びかける。

真央は一瞬なおの方を振り向いたが、すぐに『つくし坂歯科クリニック』の玄関から表へ飛び出してしまった。真央は、治療されてる他の子が泣いてるのを聞いて、こわくて逃げて帰ってしまった。

診察室に戻ったなおが、あさ美先生と百瑛子に謝っている。

「先生、百瑛子せんぱい、真央ちゃん帰っちゃいました。わたしの不注意です。すみませんでした」

「そう。しょうがないわねー、真央ちゃんたら。でも真央ちゃん歯医者さん怖いんだし、まっ、徐々に慣れてもらうしかないわね。あとで真央ちゃんのおうちに電話しといてね」

「あっ、それから、なおちゃん」

「はい」

「なおちゃんのせいじゃないわよ。気にしないで」

「はい。ありがとうございます、先生」

『つくし坂歯科クリニック』でそんな騒ぎがあってから、30分ほど後。

「……ただいま……」

「あら、真央ずいぶんはやかったのね。どうだった？ 泣いたりしなかった？」

「う、うん」

「どこ治したの？」

「奥歯……」

「ママに見せて」

「えっ、いいよ」

姫乃は真央のことばを聞いて疑わしそうに、
「ホントに治療受けてきたの？ いいから見せなさい！」
と真央に迫った。

見る見る涙が目に浮かぶ真央。
「治療受けてないんですよ。正直にいいなさい」
「えっ、えっ。ごめんなさい、ママ。ふえーん」
「真央、なんで治療しないで帰って来ちゃったの！」
「だって、だって」
目に涙を溜めている。
「だってじゃありません！ちゃんと治療しないとダメじゃないの！」
「だって、治療怖いんだもん」
「もう、真央ったら！ どうしてあさ美先生の治療受けないの！」
「あん、あん。ヒック、ヒック。ごめんなさい。ごめんなさい。………だって、………だって、真央、歯医者さん怖いんだもん！ えっ、えっ」
「しょうがないわねえ～。しかたないわ。やっぱりまだひとりじゃ無理みたいね。ママが真央を連れて行かなきゃダメね」
「ヒック、ヒック」
真央は泣きじゃくっていた。

その日の午後、『つくし坂歯科クリニック』から姫乃に電話がかかってきた。
トゥルルルル。
カチャ。
「はい、紺野でございます。

（こちら、『つくし坂歯科クリニック』の歯科衛生士の悠城なおと申します。
いつもお世話になっております。）

あっ、いえ、こちらこそ真央と詩乃がお世話になっております。

（さっそくですが、きょう、真央ちゃんの治療の日でしたのですが、真央ちゃん怖くなっちゃったみたいで、治療受けずに帰っちゃったんです。）

申し訳ございません。さきほど真央が帰ってまいりましたのですが、時間が早かったもので、おかしいと思って問いつめましたところ、治療を受けていないことを話しましたので、きつく叱っておきました。本当に申し訳ございませんでした。

（いえいえ、そんな。真央ちゃん歯医者さんが苦手なんですから仕方ないですよ。あさ美先生も徐々に治療に慣れていけばいいっておっしゃってましたから。そんなに叱らないであげてください。）

お気遣いありがとうございます。

（それで、きょうお電話さしあげたのは、真央ちゃんの治療、紺野さんさえよろしければ、明日の午前８時３０分はどうかと思ひまして……）

えっ、診察時間は９時からなんじゃ……。

（ええ、午前９時からなんですけど、真央ちゃんの虫歯はだいぶ進行しているものもありますし、虫歯の本数も多いので、治療に時間がかかると思いますので、早い目に治療に取りかかる方がいいかなと思ひまして……。年内は２９日までなんですが、予約がいっぱいの状態でして、それで明日の診察時間前に治療時間を組ませていただいたんですが……。ご迷惑でしたでしょうか）

迷惑だなんてとんでもない。本当にお気遣いいただいて、わざわざありがとうございます。こちらからお電話さしあげなくてははいけませんのに……。あさ美先生や悠城先生さえ、ご都合がつくようでしたら、わたしとしては大助かりです。明日必ず真央を連れてまいります。

（それじゃあ、２６日の午前８時３０分に予約を取っておきます。よろしくお願いします。失礼します。）

こちらこそよろしくお願いします。失礼します」

「真央、あした歯医者さん、午前８時３０分よ。診察時間前にわざわざ診てくださるのよ。ママが連れて行くからね。いいわね。ママといっしょに歯医者さん行くのよ」

姫乃は、リビングでしょんぼりと座っている真央にいった。

真央は顔を上げると、不安そうな顔で姫乃を見つめ、

「……ママ、わたしあした学校に行かなくちゃならないの」といった。

「知ってるわよ。友だちの薫ちゃんと冬休みの課題をするんでしょ」

「うん」

「朝一番に診てもらえるんだから、治療受けてから学校行きなさい。いいわね。わかった？」

「……はい」

姫乃に釘を刺されてしまった真央は、仕方なく返事をした。

“はあ～、やだなあ。あしたまたママに歯医者さん連れて行かれる……。くすん”

続く